

石狩市指定文化財

■石狩弁天社（石狩市弁天町18）

石狩市指定文化財第1号／指定年月日：昭和42（1967）年12月22日

石狩弁天社は、松前藩から石狩に派遣された秋味上乗役の山うわのりやく下半右衛門によって元禄7年甲戌年（1694年）に創建されました。主神は、海と川の神である弁財天（巖島大明神）、合殿にみょうぼうこうだいみょうじん妙亀法鯨大明神、稲荷大明神が祀られています。

※妙亀法鯨大明神像は、2007年3月に北海道有形民俗文化財に指定されました。



■チョウザメの剥製

石狩市指定文化財第2号／指定年月日：昭和57（1982）年3月31日

昭和44年に石狩川で捕獲され、剥製はくせいにされました。体長は1.9mでダウリアチョウザメという種類です。明治時代までは北海道周辺に生息しており、石狩川にも産卵のため溯上していました。



■石狩八幡遺跡ワッカオイ地点第20号墓出土の土器

石狩市指定文化財第3号／指定年月日：昭和57（1982）年3月31日

石狩川改修工事とともに遺跡発掘調査で、ワッカオイ地点で多数発見された続縄文時代末期墳墓のなかの第20号墓です。この墓は9体もの遺体が埋葬されていた合葬墓で、遺体数と同じ9個の土器が出土しており、この土器は道内の続縄文時代末期の代表的なものです。



■旧□長野商店（石狩市弁天町30-5（砂丘の風資料館の隣））

石狩市指定文化財第4号／指定年月日：平成6（1994）年3月28日

店舗は明治27（1894）年、蔵は明治10年代？に越後国北蒲原郡呉服雑貨商、長野徳太郎によって建てられました。伝統的な町家形式と洋風のアーチ窓という和洋折衷の特徴を持つ、木骨石造というつくりになっています。



■金子家文書

石狩市指定文化財第5号／指定年月日：平成11（1999）年4月22日

平成10年4月に花畔はんなぐろの金子仲久が石狩市に寄贈した、文書1600点余りのうち、明治25（1892）年から明治33（1900）年までの花畔村会議の記録、村民契約、防風林保護規約など10点が、指定されました。



（三島照子）

- （1）石狩市教育委員会 文化財・博物館開設準備室（2001）ふるさといしかり。石狩市教育委員会。
- （2）石橋孝夫ほか（1976）Wakkaoi II／石狩・八幡町遺跡ワッカオイ地点D地区発掘調査報告書。石狩市教育委員会。
- （3）石狩市市民の声を聴く課（1999）広報いしかり560号。石狩市。

いしかりししていぶんかざい
石狩市指定文化財その2

■旧白鳥番屋（はまます郷土資料館）（石狩市浜益区浜益77）

石狩市指定文化財第6号／指定年月日：昭和56年12月9日 ※旧浜益村指定文化財の指定日

明治32（1899）年、白鳥浅吉が建設したニシン番屋。建物の内部は入口から左右に居住区が分かれ、左に漁夫、右に網元のスペースが配置されています。昭和46（1971）年、浜益村が開村百年の記念事業の一環でこの番屋を補修し、浜益村郷土資料館として公開を始め（現はまます郷土資料館）、昭和56（1981）年には浜益村指定文化財に指定されました（現石狩市指定文化財）。



石狩ファイルNo.85 厚田・浜益の鯨漁, 98 旧白鳥番屋, 129 浜益の指定文化財／北海道浜益郡浜益村（1980）浜益村史

■石狩弁天社の手水鉢

石狩市指定文化財第7号／指定年月日：平成25（2013）年3月28日

寛政元（1789）年の年号が刻まれた手水鉢で、江戸本材木町（現東京都日本橋）の小林店喜兵衛が石狩弁天社に奉納したものです。手水鉢側面には、「奥州南部大畑村」（現青森県むつ市）とあります。江戸・奥州南部・石狩川河口のつながりは、当時の蝦夷地と本州との木材（蝦夷ヒノキ）交易の販路を示すものと推測されます。



石狩町郷土研究会（1987）石狩の碑第一輯／石橋孝夫（2013）いしかり博物誌128（広報いしかり11月号）／札幌市教育委員会編（1989）新札幌市史第1巻通史1／田中實・石橋孝夫（1994）石狩弁天社史

■石狩紅葉山49号遺跡出土の木製品

石狩市指定文化財第8号／指定年月日：平成27（2015）年7月24日

石狩紅葉山49号遺跡から出土した縄文文化の木製品のうち、18点が指定されました。河川漁にともなう道具（タモ、魚たたき棒、松明）、魚捕獲施設の柵、河川の交通運搬具（櫂）、木材加工や施設設置に必要とされる道具（石斧柄、石斧固定具、横槌、尖り棒）、容器類（舟形容器、柄付容器、漆塗り浅鉢）があります。約4000年前の人々の暮らしと川との関わりを示す重要なものです。



石狩市教育委員会（2005）石狩紅葉山49号遺跡発掘調査報告書

■古潭龍澤寺の鰐口

石狩市指定文化財第9号／指定年月日：平成28（2016）年10月27日

厚田区古潭龍澤寺に伝えられた鰐口2点。うち1点には「松前城下村山傳兵衛」「寛政三年亥年三月吉日」、もう1点には「寛政四壬子歳八月廿日」と刻銘があります。近世より古潭には鯨漁場があり、本州と北海道を結ぶ交易船の投錨地でもありました。漁業でにぎわう近世の厚田の歴史にかかわる貴重な資料といえます。

※鰐口：社殿や仏堂に吊るされ、参詣者が布で編んだ縄で打ち鳴らすもの。



石狩市郷土研究会（2012）石狩の碑第四輯 厚田区編／厚田村（1969）厚田村史

（荒山千恵）

は ま ま す の し て い ぶ ん か ざ い

浜益の指定文化財

■旧白鳥番屋しらとり（石狩市浜益区浜益77）

石狩市指定文化財／指定年月日：昭和56（1981）年12月9日、「未来に残したい漁業漁村の歴史文化財百選」指定

現在、はまます郷土資料館として残る旧白鳥家番屋は、明治32（1899）年の建築。白鳥栄作は羽後国酒田の人で、安政3（1856）年に来住、運上屋の下請負としてニシン漁業の経営を始めました。元治元（1864）年に甥の浅吉が跡を継ぎ、明治に入って開拓使の漁場貸付を受け、事業の拡張を進めこの番屋を新築しました。その息子、白鳥源作は、大正時代にはニシン沖揚げに蒸気機関によるウインチを導入するなど漁業技術の革新を行い、浜益第一の漁場設備を有していました。

建物は、木造平屋で延床面積365m²。中央の入口をはさんで左右に漁夫の居住区と親方の住居が配置されている典型的なニシン番屋の特徴を残しています。



■荘内藩ハママシケ陣屋跡しょうない（石狩市浜益区柏木1-27ほか）

国指定史跡／指定年月日：昭和63（1988）年5月17日

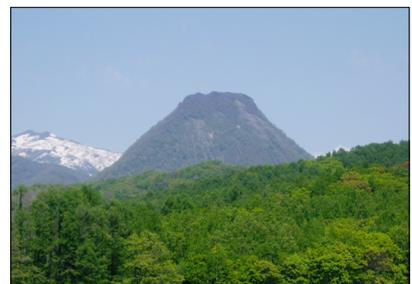
浜益川河口近くの北岸に残る「史跡ハママシケ陣屋跡」は、安政6（1859）年、幕府から領地を与えられた出羽鶴岡藩（通称荘内藩）が蝦夷地の経営を行った際の本拠地として建設したものです。その目的は、蝦夷地をロシアから防衛することと領内の開拓を目指したものです。陣屋内の主な建物としては、奉行所を中心に藩士たちが住む御家中長屋、足軽長屋、大工小屋、火薬蔵をはじめ各種の蔵、演武場などが建てられ、約200人の武士が暮らしていました。

現在は大手門が復元されており、物資の輸送に使われた水路「千両堀」も見ることができます。

■ピリカノカ／じがねやま黄金山ピンネタイオルシペ （石狩市浜益区実田）

国指定名勝／指定年月日：平成21（2009）年7月23日

浜益のシンボル黄金山（標高739.1m）は、その山容が富士山に似ていることから地元の人々は親しみを込めて「浜益富士」「黄金富士」と呼んでいます。この山は、新生代新第三紀鮮新世（530万年前～260万年前）にマグマが地表付近に上昇して冷えて固まり、その後、周囲のもろい部分が崩落して今のような姿になったと考えられています。「黄金山」という名前の由来は、その昔この付近で金が採掘されたからだと伝えられています。初心者にも絶好の登山コースとして親しまれています。



（木戸口道彰）

- （1）浜益村編（1980）浜益村史. 浜益村.
- （2）浜益村（2000）きらりはまます・浜益村勢要覧. 浜益村.

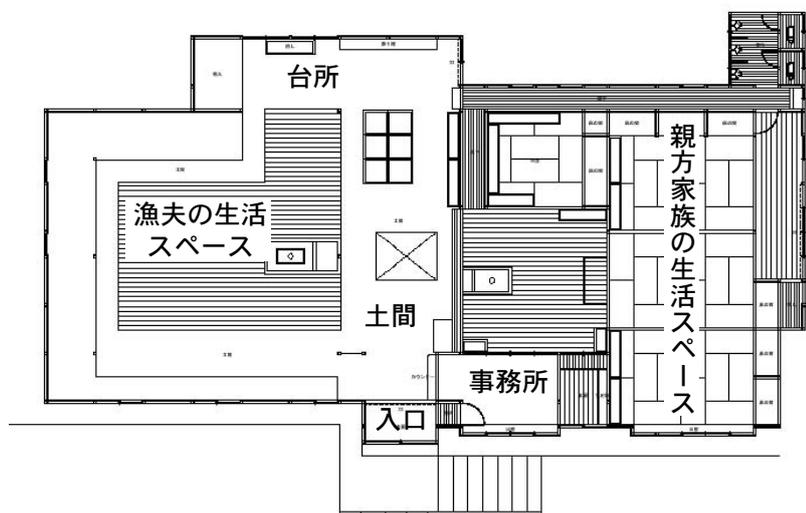
きゅうしらとりばんや
旧白鳥番屋

はまます
浜益区77番地に所在するニシン番屋。明治32（1899）年、白鳥浅吉が建設。木造平屋で、延床面積365m²。中央の入口をはさんで左右に漁夫の居住区と親方の住居が配置される典型的なニシン番屋の特徴をもっています。白鳥漁場は、浜益でも早い時期に荷揚げに電動ウインチ（クレーン）を導入するなど設備が充実していたことから「浜益随一の番屋」と言われました。



昭和8（1933）年の合同漁業会社設立により、白鳥家から合同漁業会社に所有が移り、同社の事務所として使われていました。合同漁業会社解散の後、一時は荒廃していましたが、昭和46（1971）年、開村百年を記念して修復され、郷土資料館となりました。昭和56（1981）年には浜益村指定文化財（現在は石狩市指定文化財）に指定され、平成17年（2005）年には「未来に残したい漁業漁村の歴史文化財産百選」に選出されました。

現在は、はまます郷土資料館として、旧浜益村の歴史資料を展示・公開しています。
(工藤義衛)



(1) 浜益村編（1980）浜益村史. 浜益村.

きたまえぶね
北前船

■北前船とは

大阪と蝦夷地（松前）を下関経由で往復する買積船（船主自らが商品を仕入れて交易を行う船）のことを関西方面では北前船と云いました。船主の多くは、北陸の商人でしたが、北陸では弁財船（べざいせん、べんざいせん）と呼ばれていました。



■弁財船とは

室町時代後期に瀬戸内海地方で生れた、荷物の積載のため腹部が広がった形の船の呼び名です。

■北前船の誕生

従来、北国の物資を京、大阪へ運ぶには、船で敦賀まで運び、敦賀から琵琶湖を経て大津へ、大津から京へというルートが使われていましたが、大変効率が悪かったのです。江戸時代の寛文12（1672）年に、河村瑞賢が東北から大阪への西廻り航路輸送を成功させたことにより、次第に西廻り航路が利用されるようになりました。

■大阪から松前まで

船は主に弁財船型の和船でしたが、明治以降は西洋船（帆船）も使われました。大阪から松前まで、おおよそ2週間～3週間ほどの行程だったようです。

■北前船の大きさは？

平成17（2005）年、千石（150トン）積み北前船として復元建造された「みちのく丸」は、全長32m、全幅8.5mで、往時の大きさを類推させます。しかし、千石積みと称しても実際はそれ以下の北前船も多かったようです。

■積み荷はどんなものを？

大阪からの下り荷は、木綿や油、砂糖、酒、日用品などに、瀬戸内で塩、竹、紙、敦賀で鯨漁場用の縄や筵を積んで北へ向かいました。北陸で米や酒を積むことも多かったようです。上り荷は、鯨、小麦、数の子、鮭、鱈、ナマコ、昆布などの海産物でした。

■北前船は石狩に来たか？

江戸時代の北前船の終点は松前三湊（松前、江差、箱館）で、石狩に来ることはありませんでしたが、弁財船型の船は場所請負人も使用していたので、弁財船は石狩近辺にも出入りしていたのです。明治時代になると、場所請負制度が廃止されて、北前船も厚田などへ停泊するようになりますが、それも買積船の形態が廃れる昭和初期までの数十年のことでした。

（石井滋朗）

- (1) 石狩市教育委員会（2008）厚田と海の道。石狩市厚田資料室。
- (2) 牧野隆信（1964）北前船—日本海運史の一断面。柏書房。
- (3) 森 梢伍（1983）弁財船往還記—北海道・岩内を拓いた人びと。日本経済評論社。
- (4) 厚田村・厚田村教育委員会（1995）「弁財船」と厚田村。
- (5) みちのく北方漁船博物館ホームページ <http://www.mtwbm.com/what/news0511.html>

しょうないはん 莊内藩ハママシケ陣屋跡

陣屋は浜益川右岸の低い丘陵地にあり、現在は土塁の一部が大手門付近で見られます。安政6（1859）年9月、幕府から領地を分与された莊内藩が建設したものです。設置目的は、蝦夷地をロシアなどから防衛するためです。莊内藩の領地は浜益から天塩までで、警備範囲は領地と厚田から現寿都町歌棄付近まででした。



また同藩は防衛任務だけでなく領内の開拓も目指し、領内から郷夫も募集し、清水、吉岡、弥陀、柏木原、山崎、関、門田、黄金の各村を作り、農業も行い、開拓を行っていました。そして元治元（1864）年には、道央では最も早い水田耕作を行っています。

この陣屋には領民もあり、行政も行なわれていました。陣屋内の主要な建物としては、奉行所を中心に、藩士たちが住む御家中長屋、大工小屋、武器蔵をはじめ各種の蔵、鎮守などがあり、200人余りの藩士が暮らしました。この中には後に開拓判官となった「松本十郎」が含まれています。また、陣屋の建設資材はすべて酒田から運び、陸揚げのため浜益川から陣屋下まで約435mの「千両堀」が掘られました。現在もその跡が浜益川から丘陵の麓まで残っています。

戊辰戦争に伴い藩士が酒田に引き揚げたため、陣屋は明治元（1868）年に解体されましたが、鎮守は現在の川下八幡神社として地元に残され、現在も川下地区の住民たちに親しまれています。

陣屋の構造が良好に残り幕末の国際情勢をうかがえる遺跡として歴史的、学術的に価値が高く、昭和63（1988）年、国の史跡として指定されました。

（石橋孝夫）

所在地□	石狩市浜益区川下
指定面積□	167,809.50m ²
国史跡指定月日□	昭和63（1988）年5月17日
建設年□	万延元（1860）年
建設□	莊内藩（庄内藩とも書く。正式には鶴岡藩）

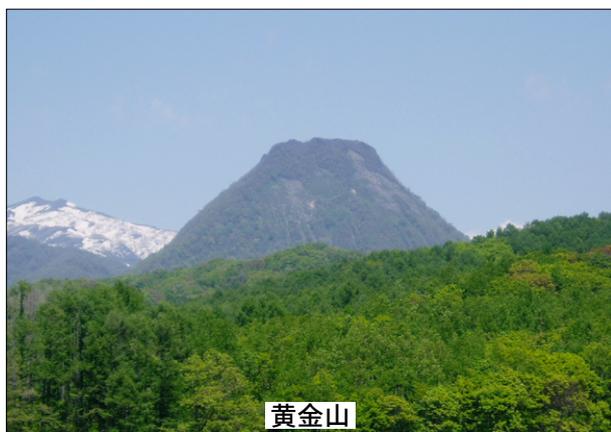
（1）浜益村（1980）浜益村史。浜益村。

こがねやま
黄金山

所在地	石狩市浜益区奥田
高さ	標高739.1m

黄金山は浜益区にある富士山に似た形の山です。浜益区では「浜益富士」「黄金富士」とも呼んで、親しまれています。この山は、新生代新第三紀鮮新世（530万年前～180万年前）にマグマが地表付近に上昇して冷えて固まり、その後、周囲のもろい部分が崩落して今のような姿になったと考えられています。

「黄金山」という名前は文化4年（1807）には、すでにあったことがわかっています。名前の由来は、その昔この付近で金が採掘されていたからだといわれています。いうまでもなくこの名は和名で、アイヌ民族はこの山を「ピンネ タイオルッペ」あるいは「タヨロウシヘ」と呼んでいました。意味は「木原にそびえる男山」「水木の多い山」です。浜益のアイヌにとってこの山は特別な山で、儀式の祭壇を設置する場合、この方向に向くように作ったといわれています。和人の手紙にも「霊山」と書かれていますので、特別な山だったと考えられます。



この山は、英雄ユカラ「クトネシリカ（虎杖丸の曲）」などに出てくるポイヤウンペの住む「高杯を立てたような山」の候補の一つとして全国的に有名です。クトネシリカの内容は、山の上の砦に住むポイヤウンペが育ち、石狩河口まで空を飛んで黄金のラッコを捕え、日本海沿岸のアイヌや海の向こうの民族と戦った末、美しい娘と結婚するといったもので、壮大なスケールの物語です。話の筋立てなどから、この物語は柏木、川下、毘砂別付近で生まれたと考えられています。

（石橋孝夫）

※かつては「ユーカラ」と表記されましたが、近年「ユカラ」とすることが多い。

（1）金田一京助（1936）アイヌ叙事詩ユーカラ 金田一京助採集並二訳、岩波文庫。

厚田・浜益の自然

石狩市の厚田・浜益地域は、低湿地である市南部とは対照的に、標高200～1000m以上の丘陵地や山地が大部分を占めています。西側は切り立った崖と海岸段丘で日本海に面しています。雄冬岬、愛冠岬の海岸線は、暑寒別大売焼尻国定公園の一部に指定されています。

■地形・地質

厚田・浜益地域を構成する山地は増毛山地と呼ばれ、浜益川を境界として、南側の樺戸山地、北側の暑寒別山地と二分されます。

樺戸山地は標高200～700mの比較的なだらかな丘陵地で、南部（厚田川より南）の沿岸には海岸段丘が発達しています。この地域の地質は、南部は新生代中新世（2400万年前～530万年前）の堆積岩から、北部は同時期の火山岩からできています。

暑寒別山地は標高1000mを越す暑寒別岳連峰を中心とした山地です。こちらは新生代鮮新世（530万年前～170万年前）の噴火による火山岩でできています。樺戸山地に比べて地質が新しいため、より急峻な山地になっています。



■気候

対馬暖流の流れる日本海に面しているため、道内の同緯度、同標高と比較すると温暖です。沿岸部での平均気温は夏には約21℃、冬は－4℃前後（冬は市南部より約1℃暖かい）ですが、冬の季節風は強く、冬期の平均風速は約5m/秒に達します。

冬期に降雪の多い日本海側気候区に属していて、最深積雪量は海沿いでは市南部とほぼ同じく1m前後ですが、山地部では2m前後まで達します。

■植生

広く森林に覆われており、大半がミズナラ、イタヤカエデ、シナノキなどからなる落葉広葉樹林帯に属しています。山地の中でも標高の高い地域にはトドマツなどを含む針広混交林帯が、さらに暑寒別岳周辺には、高山帯（高山植物、ハイマツ林）も分布しています。

■動物

海岸にはウミウやオオセグロカモメのコロニーが見られ、冬期はトドやゴマフアザラシが回遊してきます。また、国蝶オオムラサキの北限としても知られています。

（志賀健司）

- (1) 大川隆（1992）北海道の動気候．北海道大学図書刊行会．
- (2) 加藤誠・勝井義雄・北川芳男・松井愈（1990）日本の地質1／北海道．共立出版．
- (3) 気象庁 電子閲覧室．<http://www.data.kishou.go.jp/>
- (4) 小疇尚・野上道男・小野有五・平川一臣（2003）日本の地形2／北海道．東京大学出版会．
- (5) 小疇尚・福田正己・石城謙吉・酒井昭・佐久間俊雄・菊地勝弘（1994）日本の自然地域編1北海道．岩波書店．
- (6) 中村和郎・木村竜治・内嶋善兵衛（1996）日本の自然5／日本の気候．岩波書店．
- (7) 北海道（1984）暑寒別，天売，焼尻国定公園指定促進調査（自然環境）報告書．北海道．

ごきびるさんどう

濃昼山道

この山道は、当時蝦夷地を直轄していた江戸幕府の命により、場所請負人、濱屋与三右衛門によって切り拓かれ、安政4（1857）年に竣工しています。安瀬から濃昼までの二里二十四丁（10.5km）あり、かつては海路のみの通行であった同区間の陸上通行を可能にしました。地図上のルートで最も高い位置は553mで、竣工の同年に箱館奉行に従って濃昼山道を巡検した玉蟲左太夫は、山岳上や沢中の難路が続くこの山道について「かかる開き方にては開かざるも同然なり」と書いています。安政6（1859）年には、幕府から蝦夷地の警備と開拓を命じられた東北諸藩のうち、庄内藩が、藩士440人、農民1,365人を浜益、手塩などの地へ向かわせているように、防衛と開拓のために使われ始めました。

明治期になってからは、濃昼山道は、地元の人々の生活道路として使われますが、狭くて崖の迫る道であるために、非常に苦勞して通行したようです。明治43年、兵214名、

馬157頭、車両102台でこの山道の強行軍を試みた旭川の輜重第七大隊は、シャベルやつるはしで路面を削りながら必死に車両を進めましたが、急峻な山道にさしかかっからは崖下に転落する車両が続出したため、ついに車両の通行をあきらめて、車両の荷を小船に移し変え、兵が馬だけを引いて通ったと記録されています。

濃昼山道は、途中で何度か道筋が変えられているようで、『浜益村史』『厚田村史』中の地図では、最も高い位置は濃昼峠の357mで、江戸期に開削された険しい山岳部を通るルートではありません。明治の中頃、濃昼の網元木村源作氏は「…自分の漁場に通うヤン衆達のために1万円を出して厚田側の山道をつけなおした」と後年語っていることも合わせて考えると、人々が容易に通行できるようにルートが変えられていったようです。

昭和46（1971）年、国道231号線が開通するとともに濃昼山道は使われなくなりました。その後、廃道となっていたこの山道の自然と歴史的経過を多くの人々に伝えたいと「濃昼山道保存会」が結成され、会員の手によって草刈りが行なわれた結果、2005年秋に全線を通して歩くことが可能になりました。この道筋は、人々に命がけの通行を強いた安政期のルートとは異なって、比較的容易に通行でき、眺望の素晴らしさや季節ごとの花の美しさ、紅葉の鮮やかさなど豊かな自然が楽しめるものになっています。

（林 迪子）



- (1) 厚田村（1969）厚田村史. 厚田村.
- (2) 浜益村（1980）浜益村史. 浜益村.
- (3) 玉蟲左太夫（1992）蝦夷地樺太巡検日誌「入北記」. 北海道出版企画センター.
- (4) 濃昼山道保存会（2006）濃昼山道（リーフレット）. 林野庁北海道森林管理局.

いしかりべんてんしゃのほうのうぶつ

石狩弁天社の奉納物

石狩弁天社には、弁天社への奉納物のほか、当初は稲荷社などに奉納されたと思われるものが含まれています。奉納者は、阿部屋（村山家）、栖原屋など、石狩場所に直接関わった大商人のほか、石狩場所の通詞（通訳）などの名前も見えます。明治以後、管理が行き届かなくなった時期があり、他の社寺に移されてそのまま保管されているものもあります。

石狩弁天社の奉納物のうち、「みょうきほうこうだいみょうじん妙亀法鮫大明神神像」と「妙亀法鮫大明神石額」は、北海道有形民俗文化財に指定されました。

（工藤義衛）

奉納物一覧

西暦	和暦	遺物名	奉納者	所在
1774	安永3	手水鉢	千秋丸水主中	金龍寺
1786	寛政元	手水鉢	小林店喜兵衛	石狩八幡神社
1808	文化5	老将絵馬額（漆絵）	宮内定右衛門	石狩弁天社
1811	文化8	弁財天木扁額（源清正印）	石狩弁天社	
1813	文化10	石鳥居	栖原屋半助・米屋孫兵工	石狩八幡神社
1814	文化11	鰐口	米屋孫兵工、柏屋善三郎外7名	石狩弁天社
1819	文政2	石狩稲荷大明神木扁額	重松伴右衛門（松前）	石狩弁天社
1825	文政8	妙亀法鮫大明神神像	山田仁右衛門	石狩弁天社
1829	文政12	神灯一对	村山・栖原	石狩弁天社
1836	天保7	石狩稲荷大明神神札	村山傳次郎・長三郎・梶浦外	石狩弁天社
1838	天保9	妙亀法鮫大明神石額	小川幸右衛門（江戸）	石狩弁天社
1839	天保10	恵比須神像（自然石）	石狩弁天社	
1844	天保15	稲荷像（瀧幸作）	因藤多四郎	石狩弁天社
1845	弘化2	礼拝器一对（大内石可作）	梶浦五三郎・湖河長左衛門他	石狩弁天社
1849	嘉永2	毘沙門天御神体修復成就神札	阿部屋傳次郎。同甚六	石狩弁天社
1849	嘉永2	大黒尊体御神体御修復成就神札	阿部屋傳次郎。同甚六	石狩弁天社
1856	安政3	関羽正装絵馬額（文昌作）	石狩弁天社	
1856	安政3	清正虎退治絵馬額（文昌作）	石狩弁天社	
不明	不明	狛犬一对（石像）	柏屋久兵工	石狩弁天社

（1）石狩弁天社創建三百年記念事業実行委員会編（1994）石狩辨天社史。

ほうじゅさんぎんりゅうじ

宝珠山金龍寺

所在地	石狩市新町4番地
宗派	日蓮宗
本尊	十戒未曾有大曼荼羅
創立	安政6(1859)年



金龍寺は、京都の公家外山家の出である外山貞妙師が、安政6（1859）年に布教を始めたと伝えられています。名の由来は、幕府函館奉行所石狩詰調役の荒井金助の弟栄太郎が亡くなり、その冥福を祈るために、荒井金助の金の一字と達磨という人が来て龍の夢を語った事から「金竜庵」とした、と「石狩の碑」に記されています。その後、明治13（1880）年に寺号公称が認められ、金龍寺と改称されました。札幌地区では最も古い日蓮宗寺院です。

本堂には、日蓮上人、十戒未曾有大曼荼羅、鬼子母尊大神十羅刹女が、本堂の右隣にある妙見堂には、妙見菩薩、八大龍王、妙鮫法亀善神が祀られています。

妙鮫法亀善神は、生振村で鮭漁場を経営していた古谷長兵衛が明治22年（1889）年に奉納したもので、平成19（2007）年に北海道有形民俗文化財に指定されています。

境内には、北前船で運ばれ船の乗組員が奉納したと思われる手水鉢があり、「千秋丸水主中」「安永3（1774）年」と刻まれていて、石狩では最古のものです。

また、石狩詰役人である大野傳左衛門正庸（徳川幕府函館奉行所に在勤した役人で安政4年に石狩詰となり石狩シブ在任としてシブを開拓したが、安政7年11月28日に没した）の墓と、村田小一郎（石狩詰役人として荒井金助が建てた「教導館」や武道館に勤め、函館から玉及び雷管を取り寄せ洋風の鉄砲教授に当たった）の墓があります。

金龍寺では、2月に水行が行われる「節分会星祭」や8月の盂蘭盆会の灯籠流し等の一連の仏教行事が行われています。

（三島照子）

- (1) 石狩町（1997）石狩町誌／下巻、石狩町。
- (2) 石狩町郷土研究会石碑調査班（1987）石狩の碑／第1輯、石狩町郷土研究会。
- (3) 石狩町郷土研究会石碑調査班（1988）石狩の碑／第2輯、石狩町郷土研究会。
- (4) 瀬野一郎・吉永繁起・高瀬たみ（2001）石狩本町・八幡市街地ぐるっと案内、（社）石狩観光協会。

きゅうながのしょうてん

旧長野商店

旧長野商店は、石狩市弁天町30番地5にある市内最古の木骨石造建築物です。店舗は明治27（1894）年の建築ですが、石蔵は、アーチ窓の意匠や軟石の目地の施工法が、明治10（1877）年建築の水原寅蔵商店の石蔵（札幌市・現存せず）と酷似しており、建築時期が明治10年代に遡る可能性が高いと考えられています。

店舗、石蔵あわせて、長さ約81cm×高さ約30cm×厚さ約17cmの軟石が920個あまり使用されています。木造の骨組みの外側に軟石を積む木骨石造の工法が用いられている点や、伝統的な日本家屋によく見られる瓦屋根や卯建に、アーチ窓などの洋風意匠をあわせもつ、和洋折衷のデザインが特徴です。また、店舗、蔵ともに耐火性の高い木骨石造で建てられていることは珍しいとされています。

長野商店は、越後荒井浜（新潟県聖籠町）出身の長野徳太郎が、明治7年に創業しました。米、塩、呉服、反物のほか、酒造業も営んでおり、当時の石狩町を代表する商家のひとつでした。昭和30（1955）年に閉店した後、昭和63（1988）年、石狩町に建物が寄贈され、平成6（1994）年に石狩町の文化財の指定を受けました。元は親船町7番地にありましたが、道道拡幅のため、平成19（2007）年3月に現在地に移築復原されました。

（三島照子・工藤義衛）

店舗：幅9.09m（五間半）奥行7.27m（四間）、高さ8.19m、延べ床面積152.51m²
石蔵：幅5.45m（三間）、奥行7.27m（四間）、高さ6.83m、延べ床面積65.45m²

（1）日本建築学会北海道支部（1996）石狩町指定文化財旧長野商店建物調査報告書。



明治29年の長野商店（細野正子氏所蔵）